The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	物語りと対話 : 第二言語教育のための物語り論と対話原理
Author(s)	佐川, 祥予
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2017, 21, p. 29-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

物語りと対話

── 第二言語教育のための物語り論と対話原理 ──

佐川　祥予*

要　旨

物語り論は、人間科学の方法論や文化の基礎理論として研究されてきた。物語りは、人間にとって普遍共通の行為であり、生の営みと深く関わっている。本稿では、まず、物語りのもつ機能を概観したのち、バフチンの対話と照らし合わせながら、人と人との間で行われる物語りについて検討し、物語り行為の中でことばの姿を捉えることを試みる。本稿は、今後、物語り論の要素を取り入れた日本語教育の企画と教室内における相互行為の分析を行うための理論的検討の一部である。

【キーワード】物語り行為、規範、バフチン、対話、差異

はじめに

近年、第二言語教育及び日本語教育の分野では、西口（2015）によって、バフチンの対話原理という新しい視点が示された。言語に対する視線が、生きている人と人の間でことば＝発話のやり取りを伴いながら営まれる現象に戻され、ことばの生の諸側面を研究する超言語学としての日本語教育学が注目され、日本語教育学の大きな転換期となっている。

筆者は、物語り[1)]という切り口から、人の生に関わることばの教育として日本語教育を捉えたいと考えている。そのための第一歩として、本稿では、物語りに関する重要な側面を整理するところから始める。

1　物語り行為としてのことばの教育

物語り論（narratology）は、文学理論や歴史哲学をはじめとして、臨床心理学、社会学、看護学、医学、教育学など様々な分野で、人間科学の方法論や文化の基礎理論として研究されてきた（野家 2005, p.301）。このように、物語りに注目した研究が多くなされるようになってきた背景には、従来の研究のあり方の見直しや、新しいパラダイムの創出などがあげられるが、とりわけ、物語り論が「『物語る存在』という視点から人間の生の営みの意味に迫ろうとする人間研究の性格」（鳶野 2003a, p.8）を持っているという点が大きいだろう。西口（2015）は、「意識の対話的アリーナ」（西口 2015, p.58）ということばの本来の姿と向き合い、人間研究の視点からことばの教育を捉え直した。本研究も、そのようなことばの教育観を拠り所としている。

ことばの教育における物語りは、まず何よりも、理解されることと結びついている。ことばを学ぶ人にとって、ことばを使って相手に自分の気持ちを伝え相手に理解されることは、多かれ少なかれ意識されている事柄だろう。それはごく当たり前のことのようであるが、理解されるとはどういうことだろうか。鹿島（2006）は次のように指摘する。

> 自分がどのような人生を特定の環境のなかで特定の副登場人物とともに歩んできたのか、そしてその結果としてこれからどのように生きよう／生きざるをえないと考えており、その過程のなかに現在の自分をどのように位置づけてい

＊ 大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻　博士後期課程

るのかについてみずから語ること、つまりは右にいったライフヒストリーを語ることに耳を傾けてくれ、それを大筋において反復できる程度に全体として咀嚼してくれているという「物語り的」な理解のモードが成立してこそ、「彼女／彼は自分を理解してくれた（理解してくれている）」とひとは思うのではないだろうか。（鹿島 2006, p.183）

物語り的な理解モードというものは、相手の人となりを大まかに捉え、相手のそのような発話をするに至ったこれまでの経緯と現在の立ち位置を考えることで整合性のあるストーリーの中に相手の発話を位置づけるということである。しかし、全てを語りつくすということはできないはずである。この点について、次のバフチンの見解を考えると説明できる。

私たちは、実際には、言葉そのものを発したり聴いたりすることは決してありません。私たちが発し、私たちが聴くのは、真実か虚偽か、善きことか悪しきことか、重要なことかくだらぬことか、分かることか分からぬことか、などです。**言葉そのものは、常にイデオロギー的な内容と意味、あるいは、生活上の内容と意味に充たされているものです**。（バフチン 1980, p.146）

話し手と聞き手の意識が向かっている先は、言葉そのものではなく、自分や相手が話している内容がどのようなもので、どのような意味を込めているのか、といったことである。西口（2015）は、表面に現れない交信とその産物と表面に現れることばは合わせて一つの全体をなしている（西口 2015, p.103）と述べ、話し手と聞き手がことばをどう捉えているのかを示している。物語り的な理解モードは、このようなことばのやり取りの中でしか成立しえないだろう。

こうした内容と意味に満たされ表出したことばを手がかりとしながら、はっきりと表れていないように思われる事柄をも捉えることができるのはなぜだろうか。それは、私たちの物語り行為が私たちが共通にもっている世界を解釈するやり方であり、その解釈装置としての物語りを機能させ、規範的な様式を作り上げているということに起因している。そのことによって、上述のような物語り的な理解モードにある聞き手は、聞きながらストーリーを頭の中で思い描くことができ、ことばで語られていない空白の部分があったとしても、それを補って一定の一貫性のあるストーリーに仕立て上げていくことができるのである。ここで重要なことは、話し手と聞き手で共有しているものの見方があり、それを形づくるのが物語り行為で、そうした物語り行為は言語や文化を超えて、人として共通のものであるということである。自分のことばで明確に表すことができている部分と、まだあまり表わせていない部分、仮に前者を外的なもの、後者を内的なものとして捉えるとしても、それらを生み出しているのは、他者との社会的行為の中で培ってきた物語り行為であるという点では同じである。本稿の内容は上記のようなテーマを扱う。

2　物語り行為

物語りをするとはどのようなことか。野家（2005）によれば、経験は物語り行為を行うことで存在する。すなわち、複数の行為が時間的広がりの中で捉えられ、それらが因果関係をもって結びつけられるという物語り行為がなされるとき、そこに経験が生まれる。そして重要なのは、経験（過去）は生成、増殖、変容し続け完結することがないということであり、ここに経験の解釈装置としての物語りの機能がある。一方、物語られ、解釈された経験は生活世界の下層に沈澱し、やがて規範となっていくことによって私たちの生活形式を形づくる。「本人にのみ接近可能な私秘的「体験」は、言葉を通じて語られることによって公共的な「経験」」（野家 2005, p.81）となる。語るとは、経験を共同化することである。

物語りはそれぞれの人が生活する中で出会う様々な出来事を経験として形づくることであり、この経験の解釈装置である物語りを私たちは日々、機能させている。さらに、物語りをするとき、自分の身の回りにある雑多な出来事の内から自分に関連すると思われる出来事を取り出し、その出来事に自分なりの世界の中での適切な位置づけを与えている。それは意味を生み出す過程と関連している。ブルーナー（1999）の「物語という表現形式で経験を表すわれわれの能力が、ただの子どもの遊びではなく、文化の中で営まれるわれわれの生活の大部分を支配する意味を形成する手段としてある」（ブルーナー 1999,

p.137）というのは、経験を解釈するという物語りが、まさに、意味づけの機能を担っていることを表している。

ブルーナー（1999）によれば、私たちは子どもの頃から「物語的体制化に向かう一つの「生得的」で原初的傾性」（ブルーナー 1999, p.113）を持っており、幼児の段階でも規範的でないものを説明するために進んで話を作るという。また、「自分のケースを人に納得させるような方法で物語るには、言語だけでなく、規範的な形式を会得することが必要である。…多くの有効な解釈の形態を学び、それによって、人の心を見通す共感性を発達させていく。こうして、子どもは人間文化の中に参入していくのである。」（ブルーナー 1999, p.123）と述べている。これらが示すことは、経験の解釈装置である物語りには、非日常的な出来事が生じたときに、その出来事を自分にとって理解できるものへと形を変えさせる働きがあり、また、他者に対して、経験を意味のある経験として共有し、共感や理解を可能にする働きもあるということである。そして、ブルーナー（1999）は、人類の驚くべき物語才能として、情勢の緩和を提示したり、劇的に表現したり、解説するという平和維持の形態に言及し、物語りの目的を「和解させることでもなく、合法化することでもなく、弁解することでさえなく、むしろ解説することにある」（ブルーナー 1999, p.135）と述べている。このことは、物語りには、世界を理解可能な経験として自己の中に受容させ、心理的に安定化させる作用があることを示している。

このように、物語り行為には経験の解釈装置という役割がある。人は、体験を他者との共有可能な経験とし、意味をもった経験とする過程の中で、自己の世界に意味を与えていく。また、物語り行為は自己や他者を納得させる具体性のある規範的様式を生むものでもある。規範は、多くの有効な解釈の形態（ブルーナー 1999）を含み、私たちの生活形式を形づくってくれるもの（野家 2005）である。物語りの機能は、私たちの日常と深く関わりを持っており、誰もが同じようにそれを用いている。

3　バフチンの対話と物語り

3-1　バフチンの対話

物語り行為におけることばを教育的な観点に近づけるために、それが生み出される現場を見ていく。バフチンは発話を、繰り返しのきかない社会的交通の経験（西口 2015, p.51）の中で捉えており、人の生の営みに関わる物語りを扱う本稿において、バフチンの言語観はとりわけ重要である。本節では、バフチンの対話を物語りの観点から読み解いていきたい。

まず、他者と共有している空間をバフチンはどのように捉えているのだろうか。この点について、西口（2013、2015）は、人はそれぞれ、外言と内言がとりまく対話的空間をもっており、他者とことばを交わす場面では、互いの対話的空間が交わり合う中に対話者は存在していると述べている。ここでの内言と外言を含めたことばのやりとりが、バフチンのいう対話である（西口 2013, p.138、西口 2015, p.57）。互いの対話的空間が交わる場所は、意識の対話的存在圏（バフチン 1995, p.566）、あるいは、意識の対話的アリーナとなる（西口 2015, p.58）。バフチンがことばを「永遠に運動し、永遠に移ろい続ける、対話的コミュニケーションのための媒体」（バフチン 1995, p.406）と言うのは、このような自己と他者との間にある空間を対話的に捉えているからである。さらに言えば、「対話的交流こそ、言語の真の生活圏」（バフチン 1995, p.370）であり、ことばは自己と他者との対話的に共有し合う空間でしか生きられないのである。

では、自己と他者との間に生まれる対話とは、どのように生み出されるのか。発話行為という出来事に参加する者には、「近くの者たちだけでなく、遠くの者たちも含まれます――つまり、状況が発話を形づくるのです。」（バフチン 1980, p.190）。バフチンは、対話場面で実際に対面し合う者だけでなく、対話者たちが現在置かれている状況をつくり出すのに関わっている見えない他者たちの存在をも、対話場面の参加者として捉えている。また、発話のテーマに関しても「話者のことばの対象は、その対象がどんなものであれ、その発話のなかで初めてことばの対象になるのではないし、その話者が初めてそれについて語るのでもない。」（バフチン 1988, p.178）と述べ、対話場面で現在扱われているテーマは過去において、既に他の人びとによって扱われてきたものであると指摘する。そのテーマは発話者が過去に見聞きしてきたもので、扱った人々の様々な評価を含んでいる。これに関連して、ことばにも、他者の存在というものは残っている。「すべての発話は他者の

言葉に満ちており」、「他者の言葉は、その表情、その評価のトーンを持ちこむ」（バフチン 1988, pp.169-170）。そして、わたしが話すときにはわたしの表情が浸透していく（バフチン 1988, p.168）。

バフチンが広い視野から他者を捉えているのは、社会の中に対話者を位置づけているからである。このことは、バフチンの意識に対する見解を見るとよくわかる。「ちらっとひらめいた考えや体験の、まだあいまいな原初の形でも、すでに、小さな社会的な出来事〔自と他との「共存状態」〕であって、個人的な内的な営みではありません。」（バフチン 1980, p.198）とされ、外的な発話と内的な経験とはどちらも社会性をもち、質的な違いはないという（バフチン 1980, p.186）。意識も発話も、社会的な過程を経て生じるもので、自己と他者との間でやりとりされたさまざまなことが反映されているのである。

3-2　対話することの意味

バフチンは、発話という単位は、「ことばの主体の交替によってはっきりと画定されており、他者に言葉を引き渡すことで終わる。」と述べる（1988, p.137）。人が発話という行為をする背景には、応信性が働いている。この応信性について、西口（2017）は、応信性はバフチンの対話原理の主要概念の一つとして、主に宛名性の点から論じられることが多かったが、ホルクイストは、「先行する何かを承けて発する」という観点に焦点をあてていると指摘している。そして、「つねにすでにそこにある」言語システムと、「私が占める特定の場所に対して私が責任を負うことを必要ならしめる全存在」という２つの要因が先行することを明らかにしたと指摘した（西口 2017）。西口（2017）によれば、１つ目はことばのジャンルであり、２つ目は、「応信性に基づいて絶えることなく表出を続ける「私」の意識が関与する存在」を指すが、それは、私が世界から自分に送られてくるさまざまな存在に絶えることなく意味づけて応答する「私」という出来事をつくり続けているということである。さらに、応信性は絶え間なく自分を表出する表出性であり、表出の際には記号を介して意味を創出し、意味を創り出すことで存在が生まれる（西口 2017）。

ここでは２つ目の要因に焦点をあて、「責任」と「意味づけ」についてさらに見ていきたい。上記のように、私たちが発話をするときには、自分自身の世界に意味づけした出来事を積み上げ、自分の存在を形づくっている。さまざまな出来事に自分なりに意味づけをすることで自分の存在を表すことができるので、発話はいわば自分の存在をかけた行為と言える。この存在は、対話の中で、他者と自己との両方に責任を負うことが次のバフチンの見解から読み取ることができる。

> 自分自身を外部に向かって呈示するばかりか、…他者に対してだけではなく自分自身に対しても、彼がそうであるところの存在となるのである。存在するということ ── それは対話的に接触交流するということなのだ。…対話は本質的に終わりようがないし、終わってはならないのである。（バフチン 1995, p.528）。

他者に対する責任というのは、大きな時間の流れの中で連綿と続く対話の鎖を切らずに、責任をもって現在の自分の担当する発話を前から後ろへ引き渡していくことと考えられる。一方、自己に対する責任というものもあり、それは自己同一性と関わる事柄である。他者から期待される私の像と自分の中で描いている私の像の両方を重ね合わせるという責任を果たすことで、自分の存在をつくり出すことができる。このような総合的な私の存在をつくることができなければ、他者に対する責任というのも果たすことができないだろう。リクール（1990）が「…行為主体を、誕生から死まで伸びている生涯にわたってずっと同一人物であるとみなすのを正当化するものは何か。その答えは物語的でしかあり得ない。」（リクール 1990, p.448）と述べているように、物語りは人間存在における自己同一性という要素に深く関わっているが、この点については今後さらに検討していきたい。

このように、バフチンの発話の根底には、他者及び自分自身に対して責任を負うという私の存在がある。また、西口（2017）が指摘しているように、「意味づけ」は存在の根拠となるものである。さまざまな出来事に意味づけすることで、その出来事は存在できる。「私」というのも出来事であるので、自分自身に意味づけすることで、「私」として存在できる。意味づけとは、２節の物語りの機能の箇所で触れたが、それは、自分にとって馴染みのないものに出会ったとき、他者と共有している規範をもとに、自分

自身の中でそれらの物事を秩序立てて整理し、何らかの意味を与えることで、日常という現実を作り上げるために必要な要素である。そして、意味づけは記号によって行うことで、何かについて語ることである。逆にいえば、野家（2005）が、物語りの外部は物語りえない以上、指し示すことができない（野家 2005, p.323）と述べているように、意味づけされずに物語りの枠の外側にとどまるものがある。しかし、その外部のものは、後に物語の中に回収されることもある。外部から「越境してくる異他的なるものの到来と遭遇」（野家 2005, p.323）を通じて既存の物語の枠組みは揺るがされ、解体、再編成されることもある（野家 2005, p.323）。人は絶えずことばを使って表出し続け、意味づけされたものを自分の内に取り込み、自己の世界を拡張していく。

以上のように、本項では、西口（2017）を手がかりに、バフチンの発話を生み出している応信性について、「責任」を持ち「意味づけ」をしながら「私」という出来事を存在させるという人間存在の観点から論じ、それが物語り行為にも関係することを示した。

3-3　対話と物語り

ここでは、差異性を手がかりとして、バフチンの対話と物語りとのつながりを見ていきたい。

バフチンは「わたしたちの瞳には二つの異なる世界が映っている。」（バフチン 1999, p.145）という。例えば、誰かと向かい合うとき、私は相手と共に同じ物を見ることができるが、相手の顔や相手の背後にある状況などのように相手には見えないような物や関係をも捉えることができる。これを私の「視覚の余剰」（ホルクウィスト 1994, p.54）という。相手も同じようにその人自身の視覚の余剰をもっている。このような互いの余剰を合わせながら、私たちは世界を認識する。バフチンは「他者性をすべての生の基盤」（クラークとホルクイスト 1990, p.91）と捉えている。クラークとホルクイストは、バフチンの考える自己について次のように述べている。

> バフチーンのいう自己はけっして一つの全体ではない。それは対話的にしか存在しえない。それは独立した実体でも本質でもなく、他者的なものすべてとの、とくに他の自己たちとの、伸縮性のある関係のなかにしか存在しない。（クラークとホルクイスト 1990, p.92）

言表は、話者と話者との間に起こる境界の現象で（ホルクウィスト 1994, p.88）、特に、イントネーションは、「他者の存在を刻印」する（ホルクウィスト 1994, p.89）。つまり、他者の存在の認識、あるいは他者への気遣いなどをイントネーションは含んでいるのである。そして、他者性を表すイントネーションのついたことばが交わされる本来の対話を通して、「それぞれに独立して互いに融け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニー」（バフチン 1995, p.15）が生まれると考えられる。

以上のように、バフチンの対話には、自己と他者との違いを乗り越えるために対話が必要と考えられる一方で、違いがあるからこそ、対話が生まれるというようにも捉えることができるのである。重要なのは、対話が成立するためには自他の共存関係が必要で、そうでなければ、出来事の全体像を把握することもできないということである。異なりがあるから対話が生まれ、対話があるから異なりが生きてくるというような、一見すると相容れないような事柄が、バフチンにおいては矛盾なく成立している。そして、話者がことばとして表現するときには他者性が際立ち、異なる声を合わせて共同で世界を創り出していく。対話は生み出され続け、自己を絶えず表出して「私」という出来事として意味づけ、存在させようとする。「物語る動物」（野家 2005, p.16）と言われるように、人は常に物語りを行う。それは、経験したことを秩序立てて、自分にとって理解可能なものにし、他者と経験を共有しなければならないからである。バフチンの対話は、差異性の上に成り立っており、それは永遠に続く。この点は、物語り行為と通じる部分があるだろう。また、異なりを異なりとして受け入れ、同じであることを求めないバフチンの対話は、異質なものに出会ったときの語りの姿勢と重なる部分――一つの答えを目指さない「馴染みなきものをその馴染みなさのままに生きようとする開かれた語り」（鳶野 2003b, p.186）――がある。この点に関しては、閉じられた語りと、開かれた語りという２つの語りの姿勢という観点から、今後また論じていきたい。

このように、バフチンにとっては差異性と対話が包括され、ひとつの出来事を動かしている一組の歯車のように噛み合っている。本節では、対話という共有空間、対話場面の行為者とそこに関わるさまざま

な他者、対話に参加する意味といった観点から対話について概観し、その基底にある差異性に焦点を当て、対話と物語り行為を重ね合わせながら考察した。

4　まとめと今後の展望

本章では、これまでの話を踏まえながら、どのような教育の方向性が見えてくるのかを考えてみたい。

西原（2010）は、現象学と現象学的社会学の観点から、近代的な主体的／主観的発想に疑問を投げかけ、グローバル化時代の現代社会の今後の方向性――ポスト・グローバル化時代――を描いている。以下、本稿に関わる重要な概念として、「人際関係」「普遍共通文化」について整理する。

西原は、今後の社会を、相互行為論的な「人際関係」を重視するような社会という観点から捉えている。人際関係とは、人と人とのつながりの原点に立ち戻り、国境や国籍を超えるような関係のことである。そして、そのような関係づくりには、国家を超えた共通文化の発想が求められる。それは、どの社会にも一般的にみられる「普遍共通文化」――人の生命維持活動、他者との交流、社会関係をつくるなどの過程で、身振りや言語を用いてコミュニケーションを行い、労働・協働・交換の経済活動を行うこと――である。異文化理解という場合に、はじめから文化を異にするとした上で異文化を理解するという発想で特定個別文化を問題にするのではなく、同じ文化を生きているという発想に変えることが重要となってくる。

以上の内容を踏まえて、物語りとことばの教育とを重ね合わせてみると次のようなことが見えてくるだろう。ことばの教育は、人際関係づくりを実践する場として捉えることができる。そこでは、ことばを使って自分の経験を他者に伝え、思いや考えを共有しながら人と関係を結ぶ。外国語を学ぶ場合には、まさに国境を越えて他者と繋がると言うことができる。人が物語りという解釈装置を用いて他者とことばを交わしながら経験を共有し合うことは、私たち人間が日常で行っていることであり、普遍共通の事項である。

そして、前節で述べたように、物語り行為をする自己や他者は、主と客として別個に捉えられるべきではない。このような物語りとしてのことばの教育では、他者理解を次のように考える。まず、1節で述べた物語り的理解モードが働くのは、ある人の外部に存在する差異性、あるいは、ある人の内部にある文化の均質性に着目することによってではない。この点について有力なアプローチは、物語り行為に関わることばのジャンルを生かしたことばの教育が考えられる[2)]。私たちが日常で共有する経験をテーマとした言語活動に従事することで、個別の言語や文化を超えた共有可能性のあることばの教育を行うことができるのではないだろうか。物語り行為に関わることばのジャンルを軸とすることで、西原のいうところの普遍共通文化の拠り所となる場を見い出すことができ、そこで共に語り交わることができる。そして、この土台は、ことばのジャンルの置かれているテーマの枠組みや大まかな方向性のみを共有するためのものである。文化的な異なりや個人のものの見方というのは、異なる声として、その声を保ちつつ、対話の中で生き生きと表現されることが目指される。そのような対話の中で、相手の中に何かしらの形で私の姿が映し出されたり、私の中に何かしらの形で相手の姿が映し出されたりするところに、相互理解のきっかけがあるだろう。

最後に、ことばの教育におけることばの使い手を考えてみよう。ことばを学ぶ人というのは、物語りという観点からはどのように捉えることができるだろうか。野家（2005）の次の指摘は、非常に重要な手がかりとなる。

> 言語の役割は、所与としての「環境世界（Umwelt）」から〈距離〉を取り、それを人間にとって意味づけられたものとしての「世界（Welt）」へと構造化することである。それゆえ言語を習得することは、同時に分節化され構造化された「世界」との根源的な関わりを獲得することにほかならない。そこにおける言語の主要な機能は、対象を「分類」し、「秩序」づけ、「カテゴリー化」する働きであり、それによってわれわれは、対象の〈類型的〉把握が可能となるのである。（野家 2005, p.209）

野家のこの指摘は、人がもつ普遍共通の文化である物語り行為という観点に基づいたことばの教育に示唆を与えてくれる。ことばを学ぶ人は、その目標言語の世界の中での物語りをするやり方に触れながら学ぶ。外国語を学ぶ場合には、既に物語りが行わ

れている第一言語の世界に、第二言語の「〇〇語世界」としての新たな物語り方法が加わり、さらに豊かな言語空間が広がっていく。物語り行為を共通項とし、互いに物語る能力が発揮されれば、教室は物語りを育んだり、語り直したりする場となり得る。人間の営みとしての物語りの力は、学習者や教師という役割以前の個人としての私たちに光を当て、教室という空間とは一体何なのか、何になり得るのかを改めて示してくれるのである。

注

1） 野家啓一『物語の哲学』岩波書店 2005, p.300：「物語り」には、「語られたもの、物語」と「語る行為または実践」という２つの側面がある。本研究では主として後者に焦点をあてる。

2） 西口（2015）は、ことばのジャンルをベースにした言葉遣いの習得によって発話の構築法を学ぶ自己表現活動中心の基礎日本語教育を提示している。

参考文献

ヴィゴツキー, L.S.、柴田義松訳（2001）『思考と言語』新読書社

鹿島徹（2006）『可能性としての歴史――越境する物語り理論』岩波書店

クロスリー, N.、西原和久訳（2003）『間主観性と公共性――社会生成の現場――』新泉社

鳶野克己（2003a）「物語ることの内と外」矢野智司他編『物語の臨界――「物語ること」の教育学――』世織書房　pp.3-25

鳶野克己（2003b）「生の冒険者としての語り」矢野智司他編『物語の臨界――「物語ること」の教育学――』世織書房　pp.183-211

西口光一（2013）『第二言語教育におけるバフチン的視点――第二言語教育学の基盤として――』くろしお出版

西口光一（2015）『対話原理と第二言語の習得と教育――第二言語教育におけるバフチン的アプローチ――』くろしお出版

西口光一（2017）「表現活動と表現活動主導の日本語教育」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第21号　pp.37-45

西原和久（2003）『自己と社会――現象学の社会理論と〈社会発生学〉――』新泉社

西原和久（2010）『間主観性の社会学理論』新泉社

野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波書店

バフチン, M.M.、北岡誠司訳（1980）『言語と文化の記号論』新時代社

バフチン, M.M.、佐々木寛訳（1988）「ことばのジャンル」『ことば対話テキスト』新谷敬三郎他訳 新時代社　pp.113-189

バフチン, M.M.、望月哲男他訳（1995）『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房

バフチン, M.M.、伊藤一郎他訳（1999）『ミハイル・バフチン全著作 第１巻』水声社

リクール, P.、久米博訳（1990）『物語られる時間Ⅲ』新曜社

Berger, P.L. and Luckmann, T.（1966）*The Social Construction of Reality*. Garden City: Doubleday. バーガー, P.L.、ルックマン, T.、山口節郎訳（2003）『現実の社会的構成』新曜社

Bruner, J.（1990）*Acts of Meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. ブルーナー, J.S.、岡本夏木他訳（1999）『意味の復権――フォークサイコロジーに向けて――』ミネルヴァ書房

Clark, K. and Holquist, M.（1984）*Mikhail Bakhtin*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press. クラーク, K.、ホルクイスト, M.、川端香男里他訳（1990）『ミハイール・バフチーンの世界』せりか書房

Holquist, M.（2002）*Dialogism: Bakhtin and his World*. London; New York : Routledge. ホルクウィスト, M.、伊藤誓訳（1994）『ダイアローグの思想――ミハイル・バフチンの可能性――』法政大学出版